
英語文献による日本庭園史の研究：エリザ・シドモア (Eliza R. Scidmore) の “The Famous Gardens of Kioto” (京都の名園) を中心に

マイケル・シャピロ¹ 小椋菜美^{1,2} 加藤友規^{1,3}

¹ 植彌加藤造園株式会社 ² 京都大学大学院 ³ 京都芸術大学大学院

背景と目的

本研究は英語文献を通して日本庭園史を研究する可能性を模索するものである。外国人の日本庭園観を解明しようとする日本人による研究は昭和初期より存在し、外国人が残してきた日本庭園についての文献を網羅する研究ⁱもあれば、個人レベルから外国人の日本庭園観を解明する研究ⁱⁱ、あるいは日本人が世界に向けてどのような日本庭園観を伝えようとしたのかを知るための補足資料として扱う研究ⁱⁱⁱなど、研究方法は様々である。しかし、現代までの一般的傾向として外国人が著した著作物を他の英語文献と照らし合わせないままに、日本庭園史の観点からのみ捉えているという傾向を指摘できる^{iv}。一方、外国人による研究では逆に同じ著作物を当時の手紙やジャーナル記事などの英語文献を通して解釈しそれによって海外における日本庭園の歴史を研究しているが、日本の庭園史を解明しようとする研究はほとんど行われていない。このような傾向は、ある個人の人生やキャリアを扱うような伝記的研究^vにおいては特に著名だが、日本庭園を詳しく知る学者の研究^{vi}についても指摘できる。本研究では、英語圏の手紙や写真などの非出版物を収集し、日本庭園を海外に紹介した英文の著作物に照らし合わせることによって、日本文献だけでは浮かび上がってこない近代日本庭園史の側面を提示することを目的とする。

方法

研究方法としては、米国人女性ライターエリザ・ルアマー・シドモアが明治45 (1912) 年に発表した“The Famous Gardens of Kioto”という記事に着目する。これまでの研究で、シドモアが明治24 (1891) 年に刊行し

た *Jinrikisha Days in Japan* の中で並河靖之の庭園を紹介していることが知られているが、彼女が20年後に執筆した“The Famous Gardens of Kioto”では京都の歴史的な名園だけではなく、無鄰菴や對龍山荘などの近代日本庭園と、明治末期の京都に起こった庭園ブームを西洋に紹介している。幸いなことに、ニューヨーク公共図書館 (New York Public Library) がこの記事の掲載先となった雑誌『ザ・センチュリー (The Century)』の編集長を務めていたロバート・アンダーウッド・ジョンソン (Robert Underwood Johnson) の手紙を所蔵しているので、ジョンソンとシドモアが交わした手紙とこの記事の内容と照らし合わせ、この記事の執筆背景を解明することによって、当時の外国人がどのように日本庭園を理解していたのかを探る。対象とする手紙は、1910年5月6日～1911年10月4日の間にやり取りされた書簡9通である。

エリザ・ルアマー・シドモアとは

シドモアは18歳の時に、アメリカに併合された後のアラスカについて紀行文を刊行し、その後に19世紀末・20世紀初頭のアメリカにおける自然保護運動に深く関わりながら活発な執筆活動を展開させる。日本以外にも、中国、インド、およびインドネシアについて紀行文を著した。彼女はナショナルジオグラフィック初の女性理事として有名だが、*The Century* とも縁故が深かった。

彼女は1893年に国有の保護林を訴える記事をこの雑誌に投稿した後、同様に自然保護運動に深く関わったジョンソンとの交流を通し、「朝顔」や「桜」などの日本の植物をはじめとして、日本の自然文化を紹介する記事を数多く掲載した。管見の限り、“The Famous

Gardens of Kyoto”は*The Century*に掲載されたシドモアの最後の記事である。

*The Century*とは

次に、シドモアの記事の掲載先となった、*The Century*という雑誌を紹介する必要がある。この雑誌は、19世後半のアメリカにおいて宗教色の強い、道徳や文化を論じるジャーナルとして出発したが、徐々に読者の宗教的啓蒙よりも、イラストの力を借りて、その文化的素養を向上させるという方針に転じていった。*The Century*の編集長を長年（1870-1909）務めたロバート・ワトソン・ギルダー（Robert Watson Gilder）にとって、イラストは言葉以上に人々の心を動かす力を秘めた存在であった。彼を引継ぎ、“The Famous Gardens of Kyoto”の原稿が掲載された期間を含む1909-13年の間にザ・センチュリーの編集長を務めたロバート・アンダーウッド・ジョンソンも基本的に同じ編集路線を続けたのである^{vii}。

シドモアのモチベーション（1）

近代京都における新富裕層と庭園ブーム

シドモアは何故この時期に日本庭園について発表したのだろうか。彼女はジョンソン編集長宛に1910年5月6日に書いた手紙にこう書いている。「ロンドンタイムズから依頼された日本庭園（全般）に関する原稿を送ったばかりなので、この話題で頭がいっぱいです^{viii}。」シドモアがここでいう日本庭園に関する原稿とは、1910年夏にロンドンで開催された日英博覧会に合わせ、*The Times*というイギリスの雑誌が日本の社会や文化を解説する記事を日本に詳しい英米人から寄せて掲載したシリーズにシドモアが寄稿した“Japanese Gardens. A Foreigner's Impressions. The Art of Landscape Gardening.”（日本庭園。ある外国人が受けた印象。造園という美術。）という記事のことである。シドモアがこの時期に日本庭園について執筆するようになった背景には、イギリスを中心とした日本庭園ブームがあったといえよう。シドモアは続けて次のように書いている。

「*The Century*には、「いくつかの京都の古庭園」(Some Old Kyoto Gardens)と題して、より具体的に、最も魅力的で魅惑的な楽園のような庭園をイラスト入りの記事

で紹介したいと思います。記事自体はすぐに用意できますが、イラストはそういうわけにはいきません。というのも、このような庭園のストック写真から離れ、私が知る限り、どのカメラでも撮られたことのない景色を紹介したいからです。今、新富裕層の間には、京都の古い庭園を購入し、それを自慢とするマニアが存在します^{ix}。」

つまり、シドモアが日本庭園を題材にしようと考えたのはイギリスにおける日本庭園ブームに加えて、京都在住の新富裕層の間に起こった「古庭園ブーム」が背景にあったのである。京都の古庭園を紹介し、海外で日本庭園を造ろうとする富裕層向けに「モデル庭園」を示すのが一つの目的だったのではないだろうか。

しかし、日本語のスキルは高くなかったシドモアがそもそも京都の古い庭園を所有するという流行をどのように知ったのだろうか。シドモアは同じ手紙にこのように記載している。

「昨年の夏、京都で日本全国の造園家たちが一堂に会する大会がありました。大会の使節団やその他の人のためにどこもが公開されていましたので、私がこれまで見たことのない庭を数十件も見学できました^x」。

シドモアの手紙が1910年5月に書かれたことを考慮すれば、「昨年の夏、京都で行われた日本全国の造園家たちが一堂に会する大会」とは1909年7月に京都で開催された第三回全国園芸大会^{xi}であると考えられる。シドモアがこの大会で見学できた「数十件」の庭に無鄰菴が含まれていたことが“The Famous Gardens of Kyoto”に以下のように記述されている。

「数年前に造園家の大会が京都で開かれた際に63の名園を記した地図が参加者に配布されたところ、皆がこぞってそれらの庭を見ようとした。門前に現れた600人の訪問者がお辞儀をして入って行くのを見た無鄰菴の管理者は呆気にとられたが、松葉や小石が傷むことも、欠けてしまった貴重品もなく、盗まれた茶碗もなかった。寂しい野原がまるで軍隊のような訪問者たちに侵略された証拠は一つも残されなかった^{xii}。」

管見の限り、この大会で具体的にどのような活動が行われたか詳細は明らかではないが、シドモアがこのイベントに参列したという事実は、この大会が造園家たちだけでなく、外国人も含めた幅広い参加者を対象に京都の庭園を宣伝することを目的としていた可能性を示唆す

る。この大会で見た京都庭園を海外向けに視覚的にアピールすることがシドモアのモチベーションであったなら、イラストを得意とする *The Century* にその企画を提案したのは自然な流れといえよう。

ジョンソン編集長の反応

ジョンソン編集長が同年5月17日にシドモアへ送った返信で、彼は「日本庭園の記事について、少し方向性を見極めたいと思います。アメリカでは、日本庭園について多くのことが書かれています。あなたが書くような権威あるものではないと思いますが。このような記事の成功は、イラストの質とそれらを雑誌で効果的に扱えるかどうかにかかっているのです^{xiii}」と、やはりイラストの重要性を強調し、掲載については素材を確認してから検討したいとしている。

イラストとは別に、ジョンソン編集長はシドモアにもう一つ注文を付け加えている。

「この記事は大富豪向けだけのものになってはいけないのはもちろんです^{xiv}。」

つまり、イラストの重要性については、ジョンソンはシドモアと同意見だったが、「新富裕層」たちが持つとする京都の古庭園を画像で伝えたいというシドモアのモチベーションに対して、ジョンソンはイラストが一般大衆を啓発するためのものであることを強調する。6月15日、彼は念を押すようにシドモアに以下のメモを送っている。

「日本庭園の記事は、すべての読者にとって興味深いだけでなく、際立ったものであってほしいのです。そこに狙うべきターゲットがあります^{xv}。」

以上はジョンソンが原稿を読む以前の意見だが、原稿を読んだ後の感想は全く変わっていないどころか、むしろ強まっているとさえいえる。彼は1911年1月10日の手紙では次のように書いている。

「この記事は我々が掲載するのには長すぎます。短くするにあたっては、日本庭園について何も知らないが、教えてもらいたいと願っているオシコシの学校の教師に宛てたものであることを想定してみてください^{xvi}。」

ここでジョンソンが言う「オシコシ」とは、アメリカの大都会から遠く離れたウィスコンシン州にある小さい町の名前なので、彼がどれだけ非エリートの読者層を大事に考えていたのかがよくわかる。彼は続けて次のよう

に書いている。

「(この記事を)単にお金持ちの人たちだけでなく、一般の読者の興味を引くような、できるだけ幅広い魅力を持ったものにしたいです^{xvii}」。

しかし、ジョンソンが最も嘆いていたのは、シドモア の原稿が大衆向けではないということ以上に、彼女が送ってきた写真がいかに平凡だったという点である。1911年4月20日の手紙では、彼は自分がシドモアの記事についてまだコメントを送っていないことを弁明するにあたって、その写真に対する失望感を隠そうともしない。

「もし、あなたが送りたいと欲していた写真が、あなたが自信ありげに表現していたような美しい写真であったなら、私はすぐにこの記事を読み直し、当初より予定していたように真夏の休日号(8月)に使うことができたかもしれないが、平凡な写真をたくさん載せなければならないということに我々は心が折れています^{xviii}。」

つまり、シドモアが送った写真が魅力を欠いていたために、すぐに掲載したいと思っていた記事の掲載をジョンソンは先延ばしにしたのである。この記事を分かりやすく書き直して欲しいと伝えながらも、ジョンソンはこの記事のイラストを最も問題視していた。これは大衆向けに情報を発信するために、イラストが決定的な力を持つという、*The Century* のフィロソフィーをよく反映したスタンスといえよう。

シドモアのモチベーション (2)

七台目小川治兵衛との出会い

それでは、シドモアはジョンソンの批判をどのように受け止めたかという、実は彼女は手紙で何度も「カメラがうまく機能してくれない」とか、「日本庭園の本当の美しさをカメラで映すことが難しい」とか、「京都庭園のルールが厳しすぎる」など様々な理由で、写真がなかなか思うように撮れないことを説明している。しかし、ジョンソンの批判に直接答えるために、以下のように、それらとは別の理由を挙げているのは興味深い。

「私は京都で庭の仕事にあまりにも深く入り込み、造園家の小川老師という厳格で古典派の指導者を得ました。そして、西洋人の目には何も伝わらない、あまりにも日本的で何も伝わらない数多の資料本に圧倒されてし

まいました^{xix}。]

記事の写真と説明がよくないのは、「造園家の小川老師」のせいだといわんばかりのシドモアの言い分は微笑ましくもあるが、「小川老師」が七代目小川治兵衛（以後、植治とする）だとすれば、シドモアがその時代を先取りするような植治の庭園観を言葉と画像で伝えることに苦労したのは十分理解できる。前述したように、シドモアは無鄰菴など植治が作った庭をこの記事で紹介しており、1910年10月の手紙は彼女が植治取材したことを濃厚に示唆している。

「私はこの時代における唯一とでもいうべきランドスケープ・ガードナーの庭師に密着しています。そして、私は次のように予言したのです。彼は5年後にアメリカで庭園を作ることとなり、10年後にはその息子がアメリカでの作庭計画に駆り出されるでしょう。セラ^{xx}！」

「セラ」とは聖書の一節を区切るために使われる言葉であるから、シドモアが植治とその息子である小川保太郎（白楊）がアメリカでも成功することを深く信じていたことは明らかである。そう考えれば、彼女にとって植治の庭園観をアメリカの読者に宣伝することが“The Famous Gardens of Kioto”の目的の一つとなっていたのではないだろうか。シドモアが植治の教えをどこまで理解できていたかは疑問だが、彼の影響を示唆する記述がこの記事に数多く存在する。例えば、シドモアは明治維新以後に起こった廃仏毀釈で京都の「古庭園」が数多く破壊されたことを紹介し、「私の師匠は「京都の名園」(The Famous Gardens of Kioto) という非常に古い本のページをめくりながら「もう存在しない」「破壊されてしまった」と言った。」と書いている。上述の手紙と照らし合わせると、シドモアがいう「師匠」とは植治のことであると考えられる。

The Famous Gardens of Kioto に取り上げられた庭園

表1に“The Famous Gardens of Kioto”に取り上げられた庭園の一覧を示す。具体的な説明が伴わないため推測に留まるものもあるが、19箇所庭園が言及されており、彦根城庭園を除くとすべて京都市内に位置している。作庭者に関する記述は12庭園で見られ、うち5か所が小堀遠州、5箇所が小川治兵衛で、ほかに村田珠光と相阿弥の名が見られる。現在では国の文化財に指定され

ている庭園が多く、タイトル通り著名な庭園を対象としていることが分かる。明治以降に作庭された庭園が5つ掲載されており、これらは全て植治が手掛けている。「野原の庭」「小杉の庭」と名付けられた商家の庭の詳細は定かではないが、このほかの3庭園は昭和63(1988)年までに国の名勝に指定されており、作庭当初から名園として高く評価されていたことが知られている。

The Famous Gardens of Kioto;

七代目小川治兵衛が作庭した庭のイラスト

表1から、シドモアは様々な庭園を紹介しながらも、小堀遠州と植治が作庭した庭に重点を置いていることが分かる。

明確な記述があるわけではないが、記事の本文からも、彼女が小堀遠州を日本庭園の理論を確立させた人物と見做し、植治がその理論を維新後の日本社会に合わせて変革したと解釈しているように見受けられる。シドモアが小堀遠州の作庭と認識していた庭の全てを遠州が手掛けたか否かは別として、彼女は維新前に作られた京都の庭園が維新直後に破壊されたり、荒らされたりした後、明治末期において新規再生されつつある様子を伝えようとしたと思われる。掲載された明治の庭園すべてが植治の手掛けたものであることから、シドモアが植治の庭園観や作庭活動をアメリカの大衆に紹介しようとしたと推測される。現時点では確定的な結論を出すことができなくても、ここで“The Famous Gardens of Kioto”に掲載された、植治が作った庭のイラストを紹介し、これまで紹介してきた手紙のやりとりに照らし合わせて検討することとする。

図1に描かれた對龍山荘の景色について、シドモアは「歌うような小川のほとりにある茶室は、木で半分だけ隠されている。すべての茶室が陰気、瞑想的、内省的である必要はない」と説明しており、前近代の京都庭園のあり方と対比させている^{xxi}。

對龍山荘は植治が南禅寺界隈で事業家のために作った別荘庭園群の中で最も有名なものの一つである。この記事では、對龍山荘以外にも二つの植治の庭園がイラスト付きで紹介されている。これらの庭園の現状は明らかでないが、どちらも一世代で財を成した事業家ではなく、何世代にもわたって京都で商売をしてきた絹商人が自宅に作った庭である。この二つの庭園を以下に紹介する。

表1 “The Famous Gardens of Kioto” に登場する庭園一覧

庭園名	作庭者名	挿絵	ページ	備考
京都御苑 御池庭	—	○	806-07	シドモアはこの庭園を"The Garden of the Imperial Palace, Facing the Main Reception Hall of the Inner Apartments"と呼んでいる。
仙洞御所庭園	—	×	805-06	
修学院離宮庭園	—	×	805-07	
桂離宮庭園	小堀遠州	×	807-808	全ての庭の中でもっとも偉大な庭は、南西の郊外にある小さな桂宮に付属する庭園のことである。遠州藩主小堀遠州が設計した最大の庭園であり、彼の最高傑作と認められている。あらゆる美の音を奏で、あらゆる効果を含み、京都にある彼の数ある名園を代表し、琵琶湖にある彦根城の輝かしい庭園をも凌駕しているのである。
彦根城庭園 (玄宮園/楽々園)	小堀遠州	×	807	「琵琶湖にある彦根城の輝かしい庭園」に関する記述がある。
金閣寺庭園	—	×	808	
銀閣寺庭園	—	×	808	
金戒光明寺庭園 (茶庭)	—	×	809	シンプルであることが、茶の湯の基調であった。珠光の茶庭やくろ谷の茶庭、大徳寺の相阿弥やそれ以降の住職の茶庭と代表的な石庭は、西洋人には庭園と呼ぶにはあまりにもシンプルである。
大徳寺大仙院庭園？ 龍源院北庭？	相阿弥		809	
大徳寺方丈東庭	村田珠光	○	808	庭園名の記載はないが、シドモアはこの"Garden of Pearl and Jade"（真珠と翡翠の庭園）と呼んでいる。 「珠光の「エメラルドの神殿」の中庭にある「真珠と翡翠の庭園」など、詩的な名前が想像力に強く訴えかけてくる。
粟田御所（青蓮院）	小堀遠州	×	809	
醍醐寺三宝院庭園	小堀遠州	○	810	
建仁寺庭園	小堀遠州	×	811	
擁翠園	—	×	811-12	庭園名の記載はないが、以下の記述からこの庭は江戸時代に金工を家業とした後藤家が徳川家康に与えられた屋敷地である「擁翠園」だと推定される。 「500年前、足利義政が金閣寺の庭園を完成させたとき、余った石材とわずかな土地を、お気に入りの武具職人である後藤に贈った。300年前、家康は後藤家にさらに石材と土地を与え、この小さな楽園は、王侯貴族でも顔負けするぐらいの庭園装飾品の宝庫となった。16代目の子孫は、現在も両側が大きな岩で囲まれた長方形の草地に建つ、長くて低い軒を持つ家に住み続けている。 10年前、時代の変遷により、用をなさない運河がこの地域から迂回させられ、「山水」だった大庭園はやむを得ず、「枯れ山水」に分類されるようになった。石を積み重ねた庭の装飾品は、街中の新しい人々の庭を豊かにするために売られ、16代目の後藤は、街の銀行の帳簿にかじりつくようになった。」
無鄰菴庭園	小川治兵衛	×	814	
對龍山莊庭園	小川治兵衛	○	812, 815	シドモアはこの庭園を"The Garden of the Two Dragons"と呼んでいるが、"Two Dragonsは「對龍」の誤訳と思われる。
清風莊庭園	小川治兵衛	×	813	庭園名の記載はないが、以下の記述からこの庭は西園寺公望邸「清風莊」と推測される。 「大学の近くに2エーカーの田んぼを買った富豪が、「Xと同じぐらい優れた庭を作ってくれませんか」と言ったところ、「3年かかる、3万円だ」と、小堀の魂が宿った造園屋は言った。」
「野原の庭」	小川治兵衛	○	811, 814-15	正確な場所は分らないが「ビジネス街の中心にある絹織物商の家の裏手にある」との記述から、四条通付近にあったと推測される。
「小杉の庭」	小川治兵衛	○	815	正確な場所は分らないが「最も賑やかな呉服屋通りにある」という記述から、室町通の四条～五条付近にあったと推測される。

■：明治期に作庭された庭園

“Wild Moor Garden”（野原の庭園）とシドモアが名付けた庭園（図2）は「ビジネス街の中心にある絹織物商の家の裏手にある。敷地面積は50平方フィート（ほぼ15平方m）にも満たないが、庭は遠くまで見通せるほど広々とした印象を与える」と説明し、これを無鄰菴と並んで「野原」（wild moor）をテーマとした「もっとも成功した作庭」の事例と紹介している^{xxii}。

図3に示した“The Garden of Little Cryptomeria Trees”（小杉の庭）については、「最も賑やかな呉服屋通りにある絹商人は、有名な「小杉の庭」を中庭に持っています。その広さは12×20フィート（約21.6㎡）ほどである」とし、「そこには、重なり合った森のような丘の斜面と、その間を通って、このような谷間にあると思われる架空の村へと続く石の道が見えます。全体の構図は若いスギの木で構成されており、最も小さいものでも高さは3フィートに満たず、森林に覆われた山の斜面にある巨木のように、互いに均等に背後にそびえ立っているとシドモアは説明している。

“The Famous Gardens of Kyoto”に掲載された植治の庭のイラストを三つ紹介したが、新富裕層だけではなく、昔からの商業者を含めた明治末期の京都における作

庭ブームをイメージしやすい形でアメリカの大衆に向けて伝えようとしていると解釈できないだろうか。

シドモアの執筆目的の変化

シドモアがアメリカに戻った後にこの記事の原稿がどのように校正されたかについて詳細が不明であるが、彼女は1911年10月4日の手紙でテキストに加筆を加えたことを記述している。

「来週早々、写真と手直した原稿を持参する予定です。私は、（日本庭園の記事に）10ページを付け加えています。これらは全部割愛できるようにしていますが、「オシコシの学校の女性教師」を啓発させるために、日本における造園の総論と近年の新たな法則を示すための純粋な指導書です。」

テキストを分かりやすくするため、日本庭園についての一般的な解説を付け加えたのである。この手紙の末尾は、タフト大統領が次の米大統領選で負けそうだと以下のように結んでいる。

「今さらビバリーの日本庭園を取り上げても意味がないかもしれない！栄光や、名声は移りゆく（Sic Transit Gloria）^{xxiii}。」

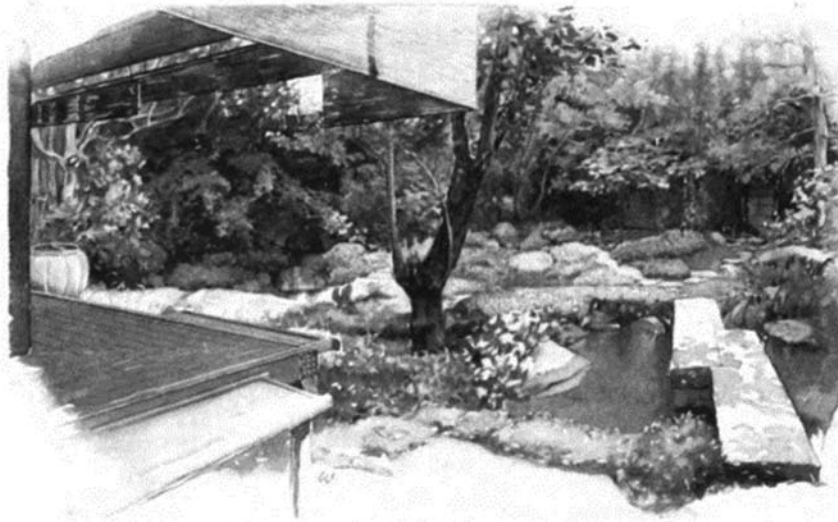


Drawn by C. D. Weldon Half-tone plate engraved by R. C. Collins

THE GARDEN OF THE “TWO DRAGONS”

This garden, which was designed for a paper merchant, is one of the most notable of modern gardens.

図1 對龍山莊庭園



Drawn by C. D. Weldon. Half-tone plate engraved by G. M. Lewis

A "WILD MOOR" GARDEN

This garden is at the rear of a silk merchant's house in the heart of the business quarter. Although the ground space measures not more than fifty feet square, the garden gives an impression of great distance and space.

図2 A Wild Moor Garden (野原の庭園)



Drawn by C. D. Weldon. Half-tone plate engraved by R. Varley

THE "GARDEN OF LITTLE CRYPTOMERIA-TREES"

This is in the court of a silk merchant's house in the down-town dry-goods quarter. The court measures about twelve by twenty feet, yet the garden makes the suggestion of overlapping spurs and forested mountain-slopes in nature's wildest retreats.

図3 The Garden of Little Cryptomeria Trees (小杉の庭)

これは、彼女が事業家のヘンリー・ウェイランド・ピーボディ (Henry Wayland Peabody) がマッサチューセッツ州ビバリー町に建造した邸宅が1911年にタフト大統領へ夏季休暇中の別荘として貸し出されたとのニュースを聞き、その日本庭園をイラストで紹介することを1910年12月15日の手紙で提案していたことに伴う内容である^{xxiv}。やはり、シドモアは当初は英語圏で日本庭

園の作庭を望むような富裕層の興味をそそる記事を目指していたが、途中からジョンソンが望むような「オシコシの学校の先生」にもよく理解できる内容に変えようとした、と考えられる。また、タイトルが当初予定していた“Some Old Kyoto Gardens”から“The Famous Gardens of Kyoto”に変更されたが、植治との出会いが大きな要因であったと考えられる^{xxv}。記事全体で6点の

庭園のイラストが掲載されているが、その半数である3点が明治になって植治が手掛けた庭園である。シドモアの執筆動機は第三回全国園芸大会をきっかけに新富裕層が古い庭園を持とうとする流行を知ったためとしているが、植治との出会いによって彼が作庭した新鋭の著名な庭園をも紹介することに変化したと結論づけるのが自然ではないだろうか。

まとめ

以上、エリザ・シドモアが“The Famous Gardens of Kioto”という記事の執筆にあたり、彼女が*The Century*の編集長であるロバート・アンダーウッド・ジョンソンと交わした手紙と記事の内容と照らし合わせ、当時の京都における庭園事情を検討することを試みた。結果、彼らが明治末期において日本庭園に関する記事を執筆・掲載した背景としてイギリスにおける日本庭園ブームと、京都における「新富裕層」による古庭園ブームの存在、また、シドモアと七代目小川治兵衛との接触の可能性を明らかにした。加えて、執筆のモチベーションとして第三回全国園芸大会との関係性が示唆された。

今後、英語文献を通して日本庭園史を研究する可能性を更に展開させていきたい。

注釈および引用文献

- i 佐藤昌「外国人の見たる日本庭園」『園芸學會雑誌』49(1)(1933)p.88-106、「外国における日本庭園：初期の造園」『造園雑誌』49(3)(1985)167-78
- ii 武藤夕香里「明治期の外国人著作に見る並河家の庭園」『日本庭園学会誌』(2009)61-66、「明治の日本にて外国人が出会った<cha no yu>と庭園」尼崎博正・麓和善・矢ヶ崎善太郎共編（思文閣出版、2019）
- iii 片平幸『日本庭園像の形成』（思文閣出版、2014）
- iv なお、イギリスにおける日本庭園の歴史を解明する橋セツの研究という例外もある。
Tachibana Setsu, “The ‘Capture’ of Exotic Natures: Cross-cultural Knowledge and Japanese Gardening in Early 20th Century Britain,” *Japanese Journal of Human Geography* 66—6 (2014)
- v Betsy Anderson, *Snapshots of a Shifting Landscape: The Japanese Garden Notebook of Elizabeth K. Roys, Washington Park Arboretum Bulletin*, Autumn 2013; Alison Redfoot, *Victorian Watercolorist Ella Mary Du Cane: A Study in Resistance and Compliance of Gender Stereotypes the Professional Art World, Orientalism, and the Interpretation of Japanese Gardens for British Society*, (California State University, Long Beach, MFA Thesis, 2011); Titia Van Der Eb, “Baroness Van Brienens Journey to Japan: Part 1 of Historical Notes on the Japanese Garden in Clingendael, The Hague, Holland,” 日蘭評論 (The

- Netherlands-Japan Review), Vol. 2, nr. 1, Spring 2011
- vi Wybe Kuitert, *Japonaiserie in London and the Hague: A History of the Japanese Gardens at Shepherd’s Bush* (1910) and Clingendael (c. 1915), *Garden History*, No. 2, (Winter 2002); Brian Pendleton, “Submerged by the Nobler Desire: The Garden Club of America Tour to Japan,” *The Journal of the North American Japanese Garden Association*, no., 2018;
- vii Samuel John, *The Best Years of the Century: Robert Watson Gilder, Scribner’s Monthly, and Century Magazine, 1870-1909* (Urbana: University of Illinois Press, 1981) ch. 4
- viii Eliza Ruhamah Scidmore to Robert Underwood Johnson (May 6, 1910) New York Public Library, Century Company Records, Series I. General Correspondence: Eliza Ruhamah Scidmore.
- ix 同上
- x 同上
- xi 第三回全国園芸大会についての研究はほとんど存在しないが、この大会は1909年7月3-6日にかけて京都岡崎で開かれた（尼崎博正、七代目小川治兵衛：山紫水明の都にかへさねば、ミネルヴァ書房、2012、p.259）。また、勸修寺経雄「京都の維新後の変遷」(明治園芸史、日本園芸研究会、1915、p.567)では「全国園芸大会はその第三回を（明治）四十二年七月に開催せり、この機会に京都府は京都府園芸要鑑および京都林泉写真帖を發行せり」とある。湯本文彦編纂による『京華林泉帖』(京都府庁、1915)は第三回全国園芸大会の開催を機に出版されており、「今回この書は本年七月本府は全国園芸大会を京都に開催するに当たり、林泉は園芸の要科にして京都の林泉は実に我国林泉の本源樽を以てその主要なるものを調査し、その实景を撮影し、その解説を作り、帳子となし、その会に提出し、かつ会員に分かつこととなり」との記述がある。
- xii Scidmore, “The Famous Gardens of Kioto,” *The Century* (April 1912), 814
- xiii Robert Underwood Johnson to Eliza Ruhamah Scidmore, May 17, 1910, New York Public Library, Robert Underwood Johnson Papers, Series II: The Century Magazine Letterbooks, vol. 19, p.540
- xiv 同上
- xv Robert Underwood Johnson to Eliza Ruhamah Scidmore, June 15, 1910. Vol. 20, p.128
- xvi Robert Underwood Johnson to Eliza Ruhamah Scidmore, January 10, 1911. Vol. 19, p.198
- xvii 同上
- xviii Robert Underwood Johnson to Eliza Ruhamah Scidmore, April 20, 1911. Vol. 24, p.113
- xix Eliza Ruhamah Scidmore to Robert Underwood Johnson, February 11, 1911.
- xx Eliza Ruhamah Scidmore to Robert Underwood Johnson, October 1910.
- xxi Scidmore, “The Famous Gardens of Kioto,” 815
- xxii 同上, 811, 814
- xxiii Eliza Ruhamah Scidmore to Robert Underwood Johnson, October 4, 1911.
- xxiv Eliza Ruhamah Scidmore to Robert Underwood Johnson, December, 15, 1910.
- xxv なお、タイトルが変更された背景にはジョンソンの意図もあった可能性も否定できない。彼はシドモアへの手紙(1911年1月4日)でタイトルを変更することを薦めている。
Robert Underwood Johnson to Eliza Ruhamah Scidmore, January 10, 1911.